

平成27年度函館市生活支援・介護予防体制整備推進協議会 第4回会議
会議概要

■ 日 時

平成28年3月24日（木） 18時30分～20時30分

■ 場 所

函館市総合保健センター 2階 健康教育室

■ 議 事

議事

(1) 第3回会議議事の補足協議について

- 1 ボランティア養成講座
- 2 平成28年度以降の生活支援・介護予防体制整備事業
- 3 函館市介護予防・日常生活支援総合事業実施方針

(2) 協議会（体）の名称について

■ 配付資料

- ・ 会議次第
- ・ 第3回会議議事の補足協議について（資料1）
- ・ 函館市生活支援・介護予防体制整備事業実施要綱（案）（資料2）
- ・ 函館市生活支援・介護予防体制整備推進協議体設置要綱新旧対照表（資料3）
- ・ 同設置要綱（改正案）（資料4）
- ・ 同設置要綱（現行）（資料5）
- ・ 平成28～29年度の生活支援・介護予防体制整備事業（案）（資料6）
- ・ 協議会の名称について（資料7）
- ・ 次回スケジュール確認票（資料8）

■ 出席委員（11名）

池田委員，所 委員，渡邊委員，佐々木委員，酒井委員，阿知波委員，
永澤委員，山本委員，能川委員，林委員，丸藤委員

■ 欠席委員（0名）

■ 傍 聴 なし

■ 報道機関 1社（函館新聞社）

■ 事務局職員

介護保険課 鈴木課長，相澤主査，渡辺主任
高齢福祉課 佐藤課長，板谷主査，塚本主査，黒田主査，加藤主査，
古口主任技師，二木主任技師

■ 会議要旨

1 開 会

2 議 事

(1) 第3回会議議事の補足協議について

1 ボランティア講座

池田会長

議事（1）「第3回会議議事の補足協議について」、事務局から説明する。

渡辺介護保険課主任

(資料1「第3回会議議事の補足協議について」、第3回会議資料4「ボランティア講座（案①）（案②）」に基づき説明)

2月12日に第3回会議を行ったが、後半部分の議事についてもう少し議論を深める必要があると考え、会長とも相談をし、補足協議ということで3つの項目について協議願いたい。まず、「1 ボランティア養成講座」について、資料1と第3回の会議資料4をご覧願いたい。

新しい総合事業への移行と、その後の地域の支え合いの体制づくりのため、地域の中で高齢者の生活を支援していくための担い手を増やしていくことが必要になる。函館市では、総合事業の基準緩和型サービスの担い手として、来年度、生活援助サービスを提供するヘルパーを養成する予定であり、内容としては、市が主催する旧ヘルパー3級程度の一定の研修を受けていただくことを想定している。第3回会議資料でお示した総合事業実施方針にもそのことを記載している。一方で、地域の中で高齢者の生活を支えるためには、事業者によるサービスだけではなく、身近な地域の中でちょっとしたニーズに対応できるボランティアによる支援の体制をつくることも必要であることから、そのような体制をつくっていくためにボランティア養成講座を実施したいと考えている。ボランティアとしては、軸となって活動を引っ張るリーダーも必要であり、また、高齢者に直接支援をする担い手も必要と考えており、丸藤委員からは第3回会議資料4として2つの講座の案を提案してもらった。

本日の協議の中で、平成28年度に実施するボランティア養成そのものについて、またどのようなことを学ぶべきか、プログラムの内容についても協議願いたい。併せて、各委員の所属団体として、ボランティア養成に対してどのような協力や連携が可能か、ご意見をもらいたい。

池田会長

事務局からボランティア養成講座の論点について説明があった。前回時間が足りなかったなので、その分、各委員からたくさんの意見をもらい、ボランティア養成を成功させるためにはどうしたらいいか議論したい。

まず、リーダーの養成講座と入門講座だが、考え方として、ボランティアを

先に養成するのか、リーダーを養成した次にボランティアを養成するのか、あるいはどちらも並行して進めていくのかという三つがあると思う。その三つの中でどう進めるのがいいのかという点について議論したい。阿知波委員はいかがか。

阿知波委員

社協の役割としてボランティア養成というものがあるので、新年度についても市と共催で講座を実施したいということで、今日開催した理事会で、来年度の事業として共催で実施することの了承を得たところである。質問のポイントからいうと、養成講座としては両方をやるのが一番いいと思うが、平成29年4月からというスケジュールを考えた時に、両方同時並行で行うのがベストだと思うが、時間的に難しいということであれば、リーダーを養成して、そのリーダーが入門講座をできるようになると効率が良いのではないかと思う。

池田会長

阿知波委員の意見では、まずリーダーを養成して、そのリーダーの協力を得てボランティアを養成するという意見である。社協も平成28年度は共催で講座を実施するという方向性が決定している。

丸藤委員にお尋ねするが、これらの講座は社協と別々ではなく一緒にやっていくということでもいいのか。

丸藤委員

ボランティア養成については、社協とはいろいろと連携したいので、どういう連携が可能かこれから相談したいと考えている。例えばリーダー養成と入門編のどちらかの講座をコーディネーターが、もう一方の講座を社協が行うのも一つだし、どちらもコーディネーターが行い、スキルアップ講座のようなものを社協が行うというのもある。いろんなやり方が考えられるが、いずれにしても社協との連携は欠かせないと考えているので、ぜひ一緒にやっていきたい。

阿知波委員

第3回会議でチラシを資料配付したが、社協で2月23日に開催したボランティア塾では、丸藤委員をはじめ能川委員と永澤委員にも講師をお願いし、きっかけづくりの講座を行った。1日だけの開催だが定員50人を超える参加があり、参加を制限したくらいだったので、興味というか注目度は高いと感じている。これから講座の内容等についてもこの場で協議していくと思うが、各委員の所属している関係団体等のお力を借りて実施していければ良いのかなと思っています。

池田会長

社協と市との連携で両方を並行して進めていくということだが、ほかに意見はないか。

丸藤委員

阿知波委員が述べたようにどちらも並行してやれば良いが、私たち、体は

一つしかないわけで、どっちも一緒にやっていくというのは、結構大変だと思う。ボリュームというのも考慮が必要だ。例えば1回の講座であれば両方1か月のうちにやれるが、本気でリーダーになるような方を養成するのであれば、1回2回の講座では恐らく全然足りないと思う。大分県の竹田市は20回というプログラムを組んでそこを卒業した方が地域を支える担い手になるようきちんと育て上げている。竹田市では、地域を支えるリーダーを作るんだ、そのためには20回くらいの講座が必要なんだということで養成していて、それくらいの講座をもし行うとしたら、もう一つの講座を並行して行うのは難しいと思う。

何が一番必要なのかというときに、去年行ったアンケート結果を見ても、各地域の中で、大きな意味でのリーダーではなく、ある程度地域の中に根差した形のリーダーになるような方が実際にはいるとは思いますが、目に見えていなかったりして、今、一番そういう人材が必要である、ということが見えてきたので、まずはその養成かなと思う。この何か月間かで、他の自治体や大学の先生とも意見交換したが、一般のボランティアをたくさん育てても、活動するチャンスがすぐないと、モチベーションが下がってすぐになくなってしまう。なので、まずは動ける環境をつくる、リーダーシップを取れる、世話を焼ける人をつくっておかないと、せっかく講座を受けても無駄になってしまう。大体人間は、1～2回話を聞いた時にタイミングが合わなくてマッチングできないと「やめた」となってしまうもので、一般のボランティアになる講座を受ける方は大体そのような感じである。逆にリーダーシップを取れる方が地域で生まれてくると、その方々がいつの間にか地域の方を口コミとか一本釣りで仲間を増やしていくといったこともあるかもしれないので、そういう意味ではやはりリーダー役になる方を先に育てた方が効率はいいと思う。

池田会長

リーダーを先に養成した方がいいという意見だが、能川委員はいかがか。

能川委員

丸藤委員と阿知波委員のご意見、そうだなあと思いながら、半分悩んでいる。我々の会のやり方としては、いろんな人と講座や研修会をやって、いろんな意見が出る中で、こういう考え方の人がいるんだ、ということが初めてわかってくるものなので、その時に、意見を持っている方と、これからどうするかをじっくり話し合う、というようにやっている。やっぱり1年2年と一緒に活動をしてみて、自分の意見を持っている人がだんだん見えてくる。自分の意見を持っている人でなければリーダーとしては難しいのではないかと思っていて、その部分で丸藤委員、阿知波委員と意見が違うのかなと考えている。

私の疑問は、リーダーとして「誰が」「どういう人」を選ぶのかということで、自分の考えとしては、いろんな方に講座に来てもらって、何回か意見交換をしながら、自分の考えを持てるようになってからリーダーになる方がいいのではないかということである。

池田会長

丸藤委員に聞くが、リーダー養成講座をやる時に条件はつけるのか。

丸藤委員

条件はつけない方向で考えている。

池田会長

初心者でもなんでも、集まった人をリーダーにしていくということか。

丸藤委員

恐らく「リーダー」という時のイメージが違っていて、例えば能川委員のような方を養成するのではなくて、地域の世話焼きを「あっ、あの人世話焼きなんだ」と思わせるくらいのイメージである。リーダー養成講座をしたからといって、その方たちが全員リーダーになることはあり得ないわけで、最初の段階で、一般のボランティアを養成することだけを念頭に置いて中身を決めていくのか、あわ良くばというか、できる限りこの中から将来地域に根差して、協議体でいうと多分3層のイメージだと思うが、そういう方々を発掘して育て上げることができればいいと思いつながらやるか、その部分の違いが大きいと思っている。リーダーだから将来NPO法人を立ち上げて中心的に引っ張っていく、個人的にはそういう人が生まれて私の代わりにやってくれればすごく楽になっていいと思うが、私のイメージとしてはそこまではいかない感じかなと。

池田会長

能川委員はチームリーダーというイメージのようだが。

能川委員

ちょっと説明不足だった。私の考えは、最初は普通のボランティア養成講座をやって、あらためてその中からリーダー養成講座に参加できる方を募るのがいいのではないかと、その人にやる気があるのかないのか、普通のボランティアとしてならやれると思う人と、もう一段階上をしてみようと思う人とはまた違うと思うので、その段階をつくった方がいいのでは、という部分が丸藤委員、阿知波委員とは意見が違うところ、という意味である。

山本副会長

社協でもボランティア塾をやっていて50人を超える参加があったということだが、その参加者の年齢層など、何か特徴はあるか。

阿知波委員

資料がないのではっきりとは言えないが、やはり60代以上の方が多い。若い学生も2～3人いたが、退職後の年代の方、在宅福祉委員や社協のボランティアセンターの個人登録者、ボランティア団体の構成員などが多かった。

山本副会長

やはり興味があるから来るということ。そうであれば、そういう方々がいるということ踏まえて、2～3回やる方がいい。講座に残っていく方がいいれば、それはリーダーになる資質のある方だと思うので、何回かやった方がいいので

はないか。それに我々のような素人では、1回話を聞いただけではなかなか理解できないこともあると思うので、何回かやった方がいいと思う。

阿知波委員

山本副会長の言うとおりであるし、丸藤委員の話にもあったが、継続的な形で続けていくのがいいと思う。また、リーダー像という話も出たが、結局函館市の総合事業、第3回会議でも2層の話が出たが、そこで活動する、いわゆるサービスB類型の地域住民に協力してもらうボランティア像というのが、丸藤委員のまとめたアンケート調査が基礎になると思うが、そこに必要な活動や人というのがどういうものなのか調査結果の中に出ているので、皆で話し合っ、そのような人の養成を目指していかないとならないのではないかな。単純にリーダーを養成しようといっても、29年4月にB類型のサービスができるのかということもあるし、そのことも併せてボランティア養成を考えていかないとならないと思う。

池田会長

ボランティアの養成については、この入門講座で函館市の実情に合ったボランティアを養成していこうと丸藤委員が案を作っている。今二つ意見が出たが、ひとつはリーダーをまず養成してその後普通のボランティアを養成しようというもの、もう一つは、能川委員や山本副会長のよう、ボランティアを養成する過程で、さらにリーダー講座も受講してみたいという人をリーダーとして養成するべきである、という意見である。

渡邊委員はいかがか。

渡邊委員

山本副会長の話にもあったが、最初からリーダー養成に手上げするという人はあまりいないのではないかなと思う。地域包括支援センターでやっている健康教室の事業もそうだが、自主化に向けてリーダーに、というと、まず尻込みする。参加するだけならいいが、その中でリーダーシップを取るとなると、やはり我々の後ろ盾が必要だったりということが見え隠れしてしまうので、ボランティア養成をやっていく過程の中で、リーダーとしてやっていけそうな人は次のステップに進む、という仕組みの方が望ましいと思う。阿知波委員からも第2層の話があったが、10圏域と考えた時に、何回かやる中で、例えば圏域のボランティアに片寄りが生じる可能性もあるので、少ないところは集中的に募集をかけるなど、複数回やればそういったこともできるのではないかなと考えていた。

事前に資料を見て、いきなりリーダー養成は難しいのではということと、意識のある方や諸団体、ナルク函館はまなすなどもそうだが、さわやか福祉財団のテキスト等を使って自主的に講座をしているところもあるので、そういった方々にこちらの講座にも参加してもらえれば、もっと幅も広がるのかなと思う。

丸藤委員

私もそのとおりで思っていて、初めから「リーダー養成講座」なんて銘打っていたら一人も来ないと思う。要は魂をどこに置くかで、先ほど話した竹田

市は、リーダーを養成したいと思ってやっているが、講座の名称は「暮らしのサポーター養成セミナー」というもので、どこにもリーダー養成とは出していない。講座の項目の中でも、最初は「雑談」というのがあり、お茶会をやったりしている。つまり、リーダーを養成するために住民を集めているということは全く感じさせないで、でも気が付いたらリーダーになっちゃっていた人がいる、という形にしている。仮にリーダー養成講座をどういう順番でやるとしても、私個人としては、「何とかリーダー養成講座」みたいな名称は、資料には便宜的に、わかりやすいようにリーダー養成講座みたいなことを書いているが、実際にやる場合はそういうネーミングは使わずにやらないと、本当の意味でいい人材を集めることはできないと思う。リーダーになりたいと自分から率先して思うタイプの人というのは、案外大したことがなくて、結局リーダーになってもあまり尊敬されず周りもついて来ないということがあるので、「リーダー養成講座」と銘打ってしてそのような人ばかり集めてしまうことにならないよう、仮にリーダー養成であったとしても、そういう雰囲気は出さずに、でも気が付いてみたらその中から何人かがリーダーとして育っていく、というような、すごく難しいことだが、そういう講座にしなければならない。阿知波委員の言うように、平成29年4月という期限が決められている中でやっていかなければならない講座なので、そういうことが必要かなと思う。

でも、それはそれでリーダー養成の中身だが、順序から行くと、より多くの方々に参加してもらえるように間口を広げる形でやって、さらにその中から次のステップへということで、ずっと一般のボランティア活動をしたいという人たち向けの講座を継続していくのと、リーダー向けの講座に移っていくのと、「リーダーコース」とは言わないで「Aコース」「Bコース」みたいな言い方で、第2ステップに進んで行くというのは、すごく良いことだと思っている。

池田会長

いずれにしても、一般のボランティアを養成していく過程の中でリーダーを養成していく形になるのだと思うが、意識付けというのは難しいと思う。ボランティアとしての意識を持っている人の意識を高めていくのか、意識も何もない人をそっちに持っていきこうというのか、何もない人の意識を高めるのは大変ハードだと思う。

丸藤委員

そのとおりだと思う。日本で恐らく唯一それをやってしまった竹田市の担当者は全国から講演依頼で引っ張りだこで、それくらいすごいことなのだが、それくらい難しいということでもある。

池田会長

竹田市では、今までボランティア養成の歴史があって、その歴史の積み重ねでそのような形になっていったのかもしれない。どちらにしても、リーダーを先に養成するのか、ボランティアを養成する中でリーダーをさらに上級に持っていくのか、どちらが函館市としては望ましいのか。平成29年度までの間にどのように持っていくのかということをも、ここである程度結論を出したいと思うが。

丸藤委員

あんまり入門とリーダーのどちらが先かということにこだわり過ぎないことも大事だと思う。講座の中で何を伝えるべきかを考えると自然発生的にできてるし、いずれにしても回数を重ねれば熱心な人たちは出てきて、自然とリーダーのような人たちも出てくるし、普通にボランティアでいいという人たちも出てくる。もう一つ、協議体と社協のどちらがどの講座が得意か、ということもあって、リーダー講座の方が社協として得意ということであればそういう流れでもいいし、そうではなく入門講座の方が社協は得意で、リーダー講座は協議体の方が得意なのであればそういう流れもあると思う。あまりどちらを優先するかをがっちり決めなくてもいいのではないか、いずれはリーダーも必要なのだから、という気がしていた。

池田会長

丸藤委員が考えた入門講座とリーダー講座の二つの資料に基づいて議論を進めているが。

丸藤委員

もともと、私はリーダー講座を協議体に提案するつもりであったが、市から入門講座についても提案願いたい、との話があり、二つの講座を考えたという経過がある。私はどちらを先にするかはこだわらなくてもいいと思う。むしろ学ぶべき内容は何かという論点（イ）の方がはるかに大切で、これがはっきりすれば自然に論点（ア）の入門講座かリーダー講座かということはどうちらかに落ち着くと思う。

それよりもっと私が重要だと思うのは、各委員にどれくらい協力をしてもらえるのかということ。普段ご自身の所属団体で、一番足りないものとか、こういう部分を市民の皆さんに担ってほしいとか考えていることを出してもらい、だからその部分を市民の皆さんに補完してもらうために養成講座をやっぺいこう、となるし、その養成講座の中で当然リーダーも生まれてくるだろうし、リーダー以外の活動できる人も生まれてくるだろう、ということになるので、この論点の順番は逆だと思う。

池田会長

だんだんと意見がボランティア、というより支援者というべきかもしれないが、支援者を養成しつつその中でリーダーとなるべき人をさらに養成していく、という方向になってきていると思うが、協議会の意見としてはそういうことでよろしいか。社協としては、ボランティアを養成する講座を続けていく中で、さらに上を目指す人を養成していくと、そのような流れで進めていけばいいかと思う。そして、丸藤委員と事務局、社協で相談しながら、具体的な内容なども詰めながら進めていけばいいと思うが、いかがか。

阿知波委員

先ほど丸藤委員が言ったように、いろんな団体との関わりというのがこの講座には必要になる。論点（イ）の「何を学ぶべきか」ということのさらに先に

ある、函館市の総合事業のサービス「B」、住民活動はどのようなものをつくっていくか、どういう人が必要なのかということをもっと掘り下げて、第2層は10圏域と決まっているので、そこでもっと集中的にやって、一番効果のある形で各委員にご協力いただくのが肝なのかなと考えている。

池田会長

協力は各委員してくれると思う。協力の内容等についてはそれぞれ相談しながら進めてもらえればと思うが。

丸藤委員

それでもいいのだが、私と事務局で決めてそれでどうこうというのが協議体の役割ではなくて、協議体がメインで決めるということが役割である。

池田会長

それはこの次の論点（イ）の話なので、順番を崩さずに議論を進めていきたい。

丸藤委員

ボランティア養成講座についても、先ほど事務局と話し合っただけということだが、事務局と話し合う前にやはり協議体の各委員から、私の団体だったらこういう所が足りない、などの意見を汲み取ってからでないと、私自身動けない。この場ではできないので、4月以降、皆さんの所に少しお邪魔して個別に話を聞き、実際にどういうことを感じているのかを私なりに深めて、それからまとめていきたい。要は、コーディネーターと事務局だけで決めるというのは私は大嫌いなので、どんなものであれこの協議体の場で決めていきたいと思っている。それこそが協議体の役割である。ボランティア養成講座についても、臨時で皆さんを集めていろいろ聞くこともあると思う。事務局との秘密会議で決めるようなことはしたくない。

池田会長

今は資料1の養成講座の論点（ア）「どちらを優先してやるか」について、それはボランティア養成をやりながらその中でリーダーも養成していきましょうと、それでいいですかということで話をしているが。

丸藤委員

それはそれでいいと思う。

池田会長

それでは次に論点（イ）「講座の中で学ぶべき内容」について、今、その内容について丸藤委員から話があったが、これから丸藤委員がコーディネーターとして各委員のところに伺い、どういう内容が必要なのか話し合いをしていき、その後また集まって会議をしていくという流れになると思うが、まず内容の案がないと話ができない。今ここで、というわけにいかないなので、内容についての案を丸藤委員につくってもらいたいが、いかがか。

丸藤委員

とりあえず、各委員のところに個別に伺いたい。

池田会長

高齢者の支援ということで、ある程度基礎的な支援の技術なども学ぶ必要があると思う。それぞれの立場で、こういうことも必要でないかといったことを丸藤委員と詰めて、そしてそれを案として再度この場で話し合い、内容を詰めていければいいと思う。

丸藤委員

皆さんに聞きたいが、どれくらいのボリュームがいいか。皆さんのイメージが、1～2回なのか、5回、10回なのか、竹田市のような20回やるものなのか、あるいは常設的にやるなど、皆さんどう思っているかお聞きしたい。

永澤委員

回数もそうだが、時間的なものはどうか。先日社協で開催したボランティア塾は、持ち時間が15分しかない中で、何を言えばいいかと教えているうちに終わってしまい、自分でも不完全燃焼だったので、回数だけでなく、時間的にどれくらい割いてやるのか、社協のように午後からやるのか、弁当持参で1日やるのかなど、その辺も考える必要があると思っていた。

池田会長

あまり長時間やっても、人が集まるものなのか。そういったボランティアの経験について、能川委員いかがか。

永澤委員

3月に社協で開催した防災ボランティアは、丸1日の講座だが参加者は100人を超えていた。

能川委員

高齢者向けの生活支援という捉え方でいくと、防災のこともあるし、認知症のこと、身体障がいのことなど、それぞれ専門の方がいる。そういう方たちに教えてもらうとなると、結構な時間もしくは日数は欲しいと思う。今回、ボランティア連絡協議会でデイサービスセンターにアンケートを取ったが、3～4施設からボランティアが認知症のことを全くわかっていないとの指摘があった。ボランティアとしてある程度知っているつもりで行っても、やはり施設職員側から見るとまだまだという捉え方をされたのかと思う。そうすると、ボランティアとして気軽にできる分野というのは現実的には少ないのかなと思う。

池田会長

丸藤委員に聞くが、逆に内容的にこういうことをやると何時間必要になる、何日間必要になる、という割り出し方はできるのか。

丸藤委員

そうしろと言われればするが。何度も言うが、竹田市はチラシを全戸配布して20回の養成講座をやったが、最初の集まりは5, 6人で、20回目は200人を超えている。つまりやればやるほど人が来た。同じ九州でも別なところは、最初に半強制的にたくさん来させて、わざと回数を多く時間も長くして、参加者が落ちていくのは構わない、それでも十何回来た人は本物だということで、本当にやる気のある人を残すというやり方をしているところもある。神戸市も同じようにわざときつくしてふるい落とすというやり方をしている。これだけ時間がかかるからこうだということもあるし、戦略としてこういう目的があるから何回やる、ということもある。自分としてはちょっと迷っているのだから、皆さんにお聞きしたかった。

池田会長

カリキュラムがある程度決まっていて、これだったら何回くらい必要だということでもなら話し合えるが、カリキュラムが何もない状態では議論も難しいのではないかと。

丸藤委員

竹田市は雑談というカリキュラムがある。

池田会長

コーディネーターの考えとして、これだけのカリキュラムを作っているからこれだけの時間が最低必要だというのは持っていなければならない。基礎的な介護の知識も必要だし、緊急時の対応も必要だし、それらを入れながらある程度の日数をかけてやっていくということで、そのための案をコーディネーターから皆に話すことも必要なのではないかと。

永澤委員

旧ヘルパー3級程度の講座という提案が市からあったが、それはどれくらいの時間数になるのか。

渡辺介護保険課主任

50時間である。

永澤委員

ヘルパー3級の50時間から端折れる部分を端折って設定して、それが基礎になっていけばいいと思うが。

池田会長

酒井委員はいかがか。

酒井委員

私はヘルパーの立場だが、池田会長の言うように、ある程度、介護技術が何時間、学科が何時間といった大雑把なカリキュラムで、このボランティアは何

時間のコースですよというのは最初に打ち出した方がいいと思う。来る人もそれを覚悟で、最後まで受けようという意識で来る。漠然と「ボランティア講座やりますよ」だと、一体何をやるのかという気持ちになる。ある程度のタイムスケジュールのようなものを立てた方が受ける側も受けやすいと思う。

丸藤委員

それを立てたいので、皆さんがイメージしているのは1回何時間の何回くらいなのかを参考意見としてお聞きしたい。

酒井委員

あまりボランティアのことは詳しくないが、ボランティア養成のコースとして最低どのくらいは受けなければならないという目安はないのか。

丸藤委員

目安は特にない。先月、社協でやったのは1日で何時間、というもの。人間の辛抱の限界は1日だから20回なんて無理だよとか、10回でもこういう内容だったらちゃんと受講する人もいる、といったことを皆さんの経験則から言ってもらえれば、それまで含めた内容で考えることができる。今は私一人の価値観と他の地域の方たちの知恵で話しているが、函館市でいろいろな活動をされている皆さんが、いろんな方と接している実感として、根拠がなくてもいいので、人間が耐えられる限界とか、これくらいの回数と時間だったらできるとか、またそれぞれ専門職の皆さんなので、カリキュラムの中に自分の所属している分野を入れるとしたら何回・何時間くらいがいいとか、そのようなことを今日でなくていいので教えてもらえると、最終的な講座内容を作っていくやすい。場所の確保も必要だし、回数が多くなれば終わりの時期が遅くなるので、回数を多く設定するほど早く動き出さなければならないし、1回だけでやるならもう少し余裕を持って考えても良いかもしれない。皆さんがどれくらいのボリュームを適切なものとして考えているのかということや、どれくらいの分野の内容を盛り込むのが良いのかということも、およそのイメージで良いので、高齢者の支援なのだからいろいろな分野についてなるべく詳しく学んだ方が良いとか、4月中くらいに教えてもらえると嬉しい。

池田会長

生活支援に必要なボランティアの技術などがある。それを丸藤委員がこれから聞きに行くので、各委員は、生活支援のためということに絞って、どういうボランティアが必要なのか、例えば高齢者とのコミュニケーション技術が必要ではないか、緊急時の対応はどうかなど、意見をまとめておいて欲しい。それらを合わせて何が何時間必要だということをもとめて、カリキュラムを作る議論ができればいいと思う。そういう形で進めていきたいと思うがよろしいか。

佐藤高齢福祉課長

少し発言したいが、どこまでのことができるボランティアを育てるのか、という整理が必要と思う。生活支援にもいろいろなものがあり、料理ができる人な

のか、掃除なのか、身体介護まではやらないが普通の生活支援ということであれば、総合事業のいきいきヘルパーということになるが、これに至らないサービス、例えばゴミ出しや見守り、窓拭きなど、そういったレベルのボランティアというイメージでいいのか。この辺までできるボランティア、というイメージ、この講座を受けるとどこまで自分ができるのかというイメージがないと、各委員がわかりにくいのではないか。どのようなことができる人、というイメージがあれば、ではこういう内容を学ばいい、という意見ができてくると思うが、いかがか。

佐々木委員

デイサービスで考えると、身体介護の部分はボランティアにお願いすることはない。責任を取れないので。デイサービスでどういうボランティアがあるのかというと、傾聴、お年寄りに寄り添って話を聞いてあげる、一緒に何かを作る、手芸等やる時に職員の補助的な役目をしてもらうといったことになる。ゲストに直接関わらない部分では掃除など。我々が身体に触れて何かすることをボランティアに求めることはないし、求めて何かあった時に責任を求められてもボランティアもかわいそうだと思う。本当に職員の補助になるかならないかという感じというイメージで自分はある。デイサービスでは、自分たちはそういう人を求めるし、たぶんこのデイサービスも、施設も同じではないかと思う。

永澤委員

施設にボランティアポイント事業で来ている方たちは、どの程度の講座を受けて来ているのか。それがわかると、それプラスアルファでいいのかなと私は感じている。議論をするうちにだんだん内容が大きく膨らみ過ぎて、一般のボランティアではできないようになっていくのではないかという気がした。自分も毎月第1水曜日に施設にボランティアに行っているが、昼食後の下膳やテーブル拭き程度のことしかしていないように感じていた。いま議論しているボランティア養成講座は、それよりももう少し上の部分で決めていかなければならないと思うが、どういう内容でやるのか、時間についても何の材料もない状態で議論している状態だが、ボランティアポイントの講座がどの程度のもので、それにどれくらいプラスすればいいのかということ考えてみたい。

佐藤高齢福祉課長

ボランティアポイントは半日の講座でやっている。流れは、ポイント制度の仕組み、ボランティアとしてのマナーや身体介護はできない等の注意事項、ボランティアを受け入れている施設の方から実際の活動や全体的な心得を講義してもらう。そのあと、実際に活動している方から、喜びを感じたことや辛かったことなどを話してもらい、最後に認知症サポーター養成講座をやって、大体3時間の講座で終わる。受講した後は自分で施設に電話をして出向いてもらう、という形になっている。これが十分か不十分かという議論はあると思うが、今のところはこのような形である。

池田会長

大体見えてきたと思う。こういったことも踏まえて、丸藤委員が皆さんのところへ行った際に意見を言ってもらいたいと思う。それらの意見をまとめて丸藤委員がまた案を作り、こういう場で議論することになると思うので、よろしくお願ひしたい。

佐藤高齢福祉課長

まず養成するのはそういう方たちだと思う。経験を積んでいけばもう少し上のレベルのことができるのではないかと思っている。

能川委員

施設の方ではなく地域の高齢者をどう見守っていくかという体制づくりについて話をしていたはずだと思う。いろんな高齢者の方がいるのを、どう我々が受け止めて対応していくかとなると、いくらボランティアといってもそれなりの専門知識が必要だと私は思っている。できれば町会等の地域に根差したボランティアが良いと思う。

池田会長

能川委員の言うとおりであり、会議の冒頭の部分で確認し合ったことだが、地域の中のボランティアをどう育てていくかということが原点にある。

丸藤委員

高齢者の何とかといってもいろいろあるが、高齢者が社会参加したいといった時にその手助けをするというのもそうだし、そもそも今日は議論になっているかわからないが、厚労省が言っているのは、介護予防に一番効果があるのは居場所、集いの場であり、人口千人につき1か所以上、体を動かせる集いの場をつくっていきましょうということで、函館でいうと260か所つくっていかなければならない。本当につくるかどうかは別として、つくるとしたらその260か所は役所の人ではなく地域の方たちが自主的に運営していかなければならないということで、将来的には、リーダーというのそういう集いの場を運営していく時の柱になるような人たち、そういう人たちを260人つくっていかないといけないということがある。そういうことも見据えて戦略を作っていきたいと思っているので、皆さんにもそういう視点を頭の隅に置いていただきたい。

阿知波委員

わからない中で手探りで企画したボランティア塾だが、ヘルパーのような家事を手伝うようなボランティアや、サロンのこと、カーリンコンというニュースポーツを紹介する運動や介護予防に関わるような内容に加えて、丸藤委員や能川委員にボランティアの心得や総合事業に関する話をしてもらったということで、手前みそだが、時間は短く詰め込んだがきっかけづくりとしては良いものだったと思う。

池田会長

そういったことも参考にしながら、丸藤委員に意見を伝えてほしい。ご協力

をよろしくお願ひしたい。

2 平成28年度以降の生活支援・介護予防体制整備事業について

事務局：佐藤高齢福祉課長

(資料2「函館市生活支援・介護予防体制整備事業実施要綱(案)」に基づき説明。)

事務局：渡辺介護保険課主任

(資料3「函館市生活支援・介護予防体制整備推進協議体設置要綱新旧対照表」
資料4「同設置要綱(改正案)」
資料5「同設置要綱(現行)」
資料6「平成28～29年度の生活支援・介護予防体制整備事業(案)」
に基づき説明。)

事務局：佐藤高齢福祉課長

地域包括支援センターの受託法人に第2層のコーディネーター業務をお願いしたいという件について、補足説明したい。

地域包括支援センターは、もともと法律で公正中立な立場で活動することとされており、地域活動などの資源の把握とそれを育てることも業務の一つになっていることから、センターの運営法人にコーディネーターの役割を担ってもらうことが、コーディネーターの業務を進めるうえで効率的ではないかと考えている。センターが10か所になることで、それぞれ規模が小さくなり、業務に対して職員の数が大丈夫なのかということもあるが、私どもとしても、それらのことを見極めたうえで、平成28年度については下半期の半年分の人件費を予算計上した。29年度以降についても、28年度の状況を見ながら、センターの業務体制を見極めたうえで引き続きお願いしたいと考えている。

ただ、私どもとしては、必ずしもセンターの運営法人にこだわっているわけではない。第2層協議体をつくっていく中で、コーディネーターにはこの人が良い、ああいう人が良い等の意見があれば、そこはセンターの運営法人に固執しているわけではないので、柔軟に対応したいと考えている。まず、10の協議体を立ち上げることは、センターの第2層コーディネーターにやってもらわなければ、私どもが10の圏域全てで、コーディネーターの人選から議論を進めていくことは、私どもの職員体制ではなかなかやり切れない。そこはセンターが地域のサービス提供主体等と普段から構築しているネットワークの力を借りて、協議体を立ち上げていきたいと考えている。

池田会長

事務局から第2層の考え方について説明があったが、質問はあるか。

丸藤委員

確認だが、まず協議体を先につくるのか。

事務局：佐藤高齢福祉課長

まずコーディネーターを置き、市も協力していくが、コーディネーターが協議体の準備をしていくことになる。国は、まず協議体をつくってそこからふさわしい方をコーディネーターに選任していくというのを一つの理想形としているが、国も最後は地域に任せるとしており、函館市の場合はコーディネーターを先に選任することとした。コーディネーターとしてふさわしい方が実際にセンターにいるというより、業務として行っている点から、センターの方が望ましいと考えたところである。そのコーディネーターのもとで協議体にどのような方を入れたら良いのかを決めていき、平成29年度には協議体をすべて揃えていきたいと考えている。

丸藤委員

ありとあらゆる専門家が、一番やってはいけないのは先にコーディネーターを置いてから協議体をつくることだと言っている。先日厚労省の加藤課長補佐が函館で行った講演の資料の中にも「協議体は住民主体の取組を進めるためのメインエンジン。コーディネーターは、すでに「地域づくり」を担ってきたような適任者がいないなら無理に配置しない。」と書いている。加藤課長補佐が講演の中であの資料を見せたというのは、やはりそこがとても大事なことからである。それでもあえて違うやり方をするほどのすさまじい理由は、今の説明からは感じられなかった。

事務局：佐藤高齢福祉課長

専門家の方々の意見については我々も承知しているが、国がそのように言うのはなぜなのか教えてもらいたい。

丸藤委員

これは、地域を皆の力でつくっていくということなので、地域の人たちのいろんな意見がある中で、この人にお任せするのが一番いい、特に2層の場合は、そういう幅広い意見の中から選ばれたコーディネーターの方こそが、地元に入って行って地元に着した新しいサービスをつくっていくのに適しているし、効果的だし、地域からも一番信頼されるということがある。そもそもこの制度は地域づくりのためのものなので、地域づくりを担っている人たちが、自分たちの地域って何だろう、地域のニーズって何だろう、足りないものって何だろう、だからこういう人に軸になって動いてもらえたらいいよね、という流れがあるほうが、本当の意味で地域づくりができていくということだと思う。私はセンターの方がダメだと言っているわけではなく、結果的にセンターの人が良いとなるならそれはそれで良いが、2層というのはより地域に着して活動している方々なので、そういう方々にとって一番何が重要かということ、地域との信頼感、地域の納得、地域の皆であの人がいいと思った、ということであり、それをどうやって最初に創りあげるかということだと思う。もちろん、最初に決めた人が地域の中に入って行って地域の信頼感を得られるような方であればいいが、そうでない場合はどうするのか。

事務局：佐藤高齢福祉課長

私どもとしてもセンターの法人に必ずしも固執しているものではない。協議体ができ、地域の皆さんがやっぱりこの人がいい、ということになれば、そこは柔軟に対応する考えである。

丸藤委員

ということは、最初センターにコーディネーターが置かれて、その後協議体ができ、やっぱり全然違うところの人が良い、となったら、それでも良いということか。

事務局：佐藤高齢福祉課長

それで良いし、そこに固執する意味はないと考えている。

コーディネーターにはいろんな役割があるが、地域のまとめ役でもあり、協議体のまとめ役でもあることから、まずそのまとめ役は誰がやるのかという話になると思う。最初はある程度効率的に物事が進むかもしれない。しかし10圏域ある中で、進み具合に差も出てくるかもしれない。その辺は、我々も関与しながらうまく進めていきたいと考えている。

丸藤委員

必ずしも固執しないと聞いたので、ちょっとは安心している。函館市は割と国の決めたことに従うことが多いと思っていたが、この第2層の時に限っては反骨精神のようなものを出している。これはとても良いことだと思う。保健福祉部の他のあらゆる施策においても、これが函館のオリジナルなんだというやり方をどんどん進めていける風潮になることを強く希望する。

池田会長

函館市の場合は、市の方針通り、コーディネーターを先に選んでから協議体をつくっていく流れで行くということで皆さんよろしいか。

渡邊委員

第3回会議の最後で、2層コーディネーターはセンターにお願いするという話があり、先行きが不安なところもあったが、必ずしもそれに固執していないという話があったことと、まずはスタートラインのところで、市と第1層の皆さんのお力を借りられるということがはっきりしたので、そこは安心した。役割として、スタートラインだからこそ大変になるということもあるが、不安を持っていた部分が解消されたので、そこは地域包括支援センター連絡協議会のメンバーにも申し伝えたいと思う。今のセンターが分かれて半年後には2層のコーディネーター、という部分については、この協議会の中でも議論をお願いしたいと思う部分もある。実際にコーディネーターを出す時に、新しい人を入れるとして、その人に担わせるわけにはいかないだろう、では経験のある職員を出すとなった時に、センターの事業の力はどうなるのか、そこがどんなふうに落ちてしまうのか、という心配もあるので、その辺もこれから市と意見交換しながらやらせてもらいたいと思う。各委員にもご理解とご協力をお願いしたい。

池田会長

第2層については、市の基本的な考え方で進めていくことでいきたいと思う。

資料の6について、先ほど事務局から説明があったが、平成28年度の上半期、地域の支え合いなどについて、市、包括、第1層が各方面へ普及啓発や情報発信をしていく、とある。この「第1層」は、コーディネーターと協議体の両方を意味していると思うので、各委員も、それぞれいろんな会議や研修会等があると思うので、皆さんの協力の中で、いろんな所で普及啓発を行うなど、今後、第2層協議体がスムーズに運営していけるようご協力願いたい、そういう意識を持って取り組んでもらいたいと思う。

3 函館市介護予防・日常生活支援事業実施方針について

事務局：渡辺介護保険課主任

第3回会議資料2「函館市介護予防・日常生活支援事業実施方針（案）」をご覧願いたい。第3回会議で説明をし、一定程度ご意見等もらっていたが、さらに何かあれば伺いたい。

池田会長

サービス事業等について方針が示されているが、実施方針について意見等あるか。なければ議事を進める。

(2) 協議会（体）の名称について

事務局：渡辺介護保険課主任

（資料7「協議会の名称について」に基づき説明）

池田会長

何か意見はあるか。

丸藤委員

「協議会」だと、事務局で決めたことを承認するというイメージが強く、「協議体」だと、皆で体と頭を動かしながら一緒に決めていく、仲間というイメージが強い、というのが個人的にあるので、どちらかと言われれば「体」の方が良いと思う。「生活支援コーディネーター」というのも、地域の方に何者かということを知ってもらうために、ぱっと見て「こんなことやってるんだな」とイメージしやすい名称が良いと思っている。もっと親しみやすい名称になれば、2層の協議体でも活発に動いていけると思う。

どれが良いという意見を言ってしまうてもかまわないか。

池田会長

どうぞ。

丸藤委員

国の資料等で、「生活支援コーディネーター（支えあい推進員）」という書き

方をされていることがあるが、これは、厚労省の会議の中でさわやか福祉財団の堀田会長が「生活支援コーディネーターではわかりにくい」という意見を言い、「支えあい推進員」という名称を勧めたが、既にいろんな資料で「生活支援コーディネーター」を使っていたため変えることができず、括弧書きで併記する形になったもの、ということ踏まえると、個人的には、事務局案の(エ)「地域支えあい推進協議体」というのが、簡潔でわかりやすいし、第三者に説明するときにもわかりやすいと思う。「地区」をつけても良いと思うし、第2層で別な名前が良いとなれば変えていけば良いと思う。

池田会長

何かもっとかわいらしい名称はないものか。

丸藤委員

確かにこれでもちょっと固いが、正式名称がこれで愛称みたいなものがあると良いのかもしれない。

山本委員

『協議体』って何?と言われぬか。「協議会」だと皆さん普通に聞いたことのある言葉だと思うが、「協議体」はあまり聞いたことがない。

池田会長

どちらも言葉としてはあるが、普通我々の中で使うのは「協議会」が多い。

山本委員

「体」になると、「それは何?」と言われそうな気がする。

池田会長

この資料7からすると、全国を見ればどちらもあるということなのか。

事務局：渡辺介護保険課主任

丸藤委員の方が事例を知っていると思うが、個人的な感覚としては「どちらもある」という感じである。

丸藤委員

割合としては「協議体」の方が多いように思う。

池田会長

私はどちらでもいいと思う。皆さんの意見で「体」か「会」か決めていきたいと思う。

能川委員

「会議」というのもあると思う。一つ考えてきたが、「シニアライフ推進会議」というのはどうか。横文字というのはあまりないようだが。

池田会長

新しい案が出てきたが、まず第一に、「体」にするか、「会」にするか、「会議」にするか、これを決めていきたいと思う。

所委員

「体」と「会」の違いについて、もう一度説明を聞きたい。

丸藤委員

一般的にいうと、個人的な意見ではあるが、「協議会」は事務局がつくったものを承認するものというイメージで、「協議体」は聞きなれないかもしれないが、自分たちが主役で考えていく組織体というイメージと自分は認識していて、この会議は自分たちでこのまちをどうしていくのかということを考えていかなければならないものなので、「協議体」の方が良いと思っている。

所委員

この会議にはいろんな主体が参加している、ということから、私は「体」の方としたい。

- ・挙手の結果（池田会長を除く10人が挙手）
 - 「協議会」 2人
 - 「協議体」 6人
 - 「会議」 2人

池田会長

では、まずこの会は「協議体」でいくという意見となった。

次に名称について、考えてきた方はいるか。

では、「地域支えあい推進協議体」と、「シニアライフ推進会議」を「シニアライフ推進協議体」として、この二つで決めたい。

- ・挙手の結果（池田会長を除く10人が挙手）
 - 「地域支えあい推進協議体」 9人
 - 「シニアライフ推進協議体」 1人

池田会長

では、「地域支えあい推進協議体」という名称とすることによろしいか。（異議なしの声）

3 その他

池田会長

その他ということで事務局の方、何かあるか。

事務局：相澤介護保険課主査

資料3について補足させていただきたい。協議体設置要綱の新旧対照表のう

ち, 改正案の第7条第4項「協議体の議事は, 出席委員の過半数をもって決し, 可否同数の時は, 会長の決するところによる。」を削除したいと考えていたが, 誤って記載したままとなっていた。

事務局：佐藤高齢福祉課長

今, たまたま挙手で名称を決めたが, 基本的には, 過半数で決するものではなく, 委員皆さんの総意をもって物事を判断していきたいと考えている。実際に「協議体」となり, ある意味組織的に緩やかになったこともあるので, この条項は削除したいと考えたが, いかがか。

(異議なしの声)

事務局：相澤介護保険課主査

平成28年度第1回目の協議会は5月の予定なので, 資料8「次回スケジュール確認票」に記入し, ご提出いただきたい。以上で会議を終了する。